

免疫検査の基礎

免疫反応から考える臨床検査

◎増尾 康朗¹⁾

オーソ・クリニカル・ダイアグノスティックス株式会社ビトロス事業部学術部 テクニカルソリューションセンター¹⁾

近年ますます測定機の自動化が進み、検体を測定機に装填するだけで測定から結果の報告まで一括で管理するシステムを導入する病院が増えてきている。これまで、生化学検査、免疫検査と別れていた検査分野も統合機の出現によりその垣根は一層低くなった。自動化においては検体処理工程における個人差、人為的ミスの軽減、統合機においては1機台で疾患関連項目のデータを参照し、臨床判断が行える等その利点は大きい。

一方で、これらテクノロジーの進化により測定機がブラックボックス化し、用いられている測定原理、それぞれの検査項目の処理中に起こっている反応から結果に影響を与える要因が見えにくくなったことも事実である。自施設で用いられている測定機内の反応を正しく理解することは臨床所見と合わない検査値に遭遇した際に適切な対応策を考案するための助けになることも多い。

本講演ではメーカー間差の実態から「ある項目で臨床所見と合わない結果が出た」、「モニタリング患者さんで、ある時期を境に不可解なデータ変動が見られた」、「測定機切り替えで相関を取ったら相関が芳しくないもしくは感染症項目で乖離検体が出て解釈に困った」など日常遭遇しうる経験に関して考えられる要因を反応原理、抗体の特性の観点から解説する。

また、メーカー間差の是正として2018年に予定されているFT4、TSHの標準化、ハーモナイゼーションへの取り組みに焦点を当て、実際のデータを用いて解説する。標準化、ハーモナイゼーションはこれまでのメーカー間差が是正され全メーカーの測定値が直接比較

できること、ガイドラインの診断・治療判定値も統一基準を設けることが期待されている。一方で、これまで測定された値からの数値変動に対する課題も残されている。その課題についても触れる予定である。

TEL : 0120-03-6527